マイケルのため息

マイケルはなやんだ。そして、ため息をついた。

マイケルは、この間もしくじった。子どもが帰ってきたのに気づかずに寝ていた。ハッとしてコタツから出たときには、子どもはもう居間に入っていた。

「ただいま、マイケル。」

あわてるやら恥ずかしいやら、そわそわといそがしいふりして、子どものお世話をかいがいしくした。

以前は決してこんなことはなかった。子どもの帰る気配を遠くから感じて、玄関のチャイムが鳴るだいぶ前から、土間にすわって戸の開くのを待っていたものだ。一度車にひかれて足を引きずるようになって、医者から外出禁止をくらうまでは、子どもやお母さんが外出したとき、それこそ時間を見はからって帰り道の途中まで必ず出迎えに行ったものである。

「ふがいないやら情けないやら……。」

時々ふにゃふにゃ言いながら、ひとりでにため息が出るのだった。子どもたちがまだ小さかったときは、庭で子どもが遊ぶとき必ずついて、見晴らしのよい高い木に登って、上から子どもたちをじっと見守っていたものだ。その子たちも、上の娘は幼稚園で先生と呼ばれている。来年の春には、遠いところへお嫁に行くそうな……。下の男の子はこの間アメリカというところの留学から帰ってきて、この夏には中国というところの大学に行くそうな……。行ったら4～5年は帰れないそうな……。お金がかかるからめったに戻れない。そんな話をお父さんとお母さんがしていた。

マイケルはため息をついた。

マイケルは百歳をこえていた。若いころの左足ケガの後遺症もあり、歩くとき

時々よろけてしまう。いつぞやは足がもつれて、不覚にも転んでしまった。ハッとして起き上がったとき笑っているお母さんと目があったが、ムッとして何ごともなかったようにヒゲをピント立てて歩いた。

人間年齢では二十一歳。一年に四歳年をとっている。

この家に来たとき、小学校に上がったばかりの上の娘と、乳母車の男の子にくっついて、ねらいすましして、よその家から家出してやってきた。前の飼い主が犬を飼いだしたのに腹を立てたのがきっかけだったが、結局この家でお世話になることにした。

メス猫なのにマイケルとは、自分でもとても気に入らなかったが、上の娘に当時はやっていたマンガから名づけられた。呼ばれるたびにぶぜんとしたが、今ではすっかりいたについて

「マイにゃん…。」

と呼ばれると、思わず声の方向に耳が動いてしまう。

自分の子も五匹育て上げ、それぞれもらわれていった。それからは、飼い主の二人の子どもたちを育て上げるお母さんの片腕となっていっしょに闘ってきた。

お父さんには、いじめにくるネコを何回か遠いところへもっていってもらった。昔の飛ぶ鳥も落とす勢いはどこへやら、寒い冬はコタツから出られない。雪合戦に参戦していたころがなつかしい。飛ぶ鳥どころか最近は、庭に侵入してくる隣のオス猫を目にしても、感情がわき上がらない。以前のいかくのうなり声が出ない。ただボーッとして子どもと一緒に夜のテレビ画面をながめるのは、昔と変わらない。

こんなマイケルもネコの性で必ず反応することがある。好物のアジの塩焼きの

においがした時である。以前もっていた上品さがにぶって、台所のテーブルの上に登る。そのジャンプぶりの若さに家族もびっくりする。

「マイケル元気。やる気まんまん！」

でも2回に1回はずるっとすべり落ちて、お父さんにキャッチされる。

きれい好きなマイケルとして最近一番のなやみは、ときたまウンチをその辺に落としていること。その掃除が、朝の早いお父さんの寝起き一番目の仕事になっている。

マイケルはなやんだ。そして、ため息をついた。

「上の娘が嫁に行くまで、なんとか頑張らなきゃニャアー。……下の息子が中国？──ふーー。頑張れるかニャアー……」